

「自分にとっての働く」を 考える高校事例

社会の変化に振り回されることなく、
一人ひとりが自分の良さを生かして働いていくために、高校は何ができるのでしょうか。
3校の事例から探ります。

CASE1

スクールのスローガン“HAPPY”を カリキュラムに落とし込み 自分らしさを活かした人生をめざす

白根高校（山梨・県立）

「幸せ」と「自分らしさ」を
スクールのスローガンに

“HAPPY”というスクールのスローガンを掲げている白根高校。「幸せ」という意味と同時に、34ページの図1のように「Healthy」「Active」「Positive」「Powerful」「Yourself」の頭文字をつなげたHAPPYでもある。特に「(Be) Yourself」が表す「自分らしさを活かした人生を送ること」を願ったスローガンだ。「自分らしさ」とは、人が自分の役割を果たして活動し社会に貢献すること、つまり「働くこと」を通して表現できるものと考えている。

2020・2021年度には山梨県の「キャリア教育推進実践研究校」の指定を受け、「“HAPPY”自分らしさを活かした人生をめざして」という主題で研究を実践。この取組は文部科学省の「第14回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」の表彰校に選出されている。



校長 中村千尋 先生
(左)、進路指導研究
係主事(取材時) 秋
山香江 先生(右)

幸せ因子を言語化して 生徒の目標を可視化する

取組の背景には、同校の生徒が大人しくて真面目な一方で、高校入学までにリーダー経験などが少なく、自己肯定感が低いという課題があった。

「高校で自分の殻を破りたいと考えている生徒が多いと感じています。例えば、女子生徒がやりたい活動の人気ナンバー1が生徒会活動です。自信をもって人前に立てる力をつけたいという意欲の表れだと思います」(中村千尋 校長)

「こうした生徒たちにそれぞれの幸せについて意識させること、生徒自身が自分のキャリアを考えるうえで、学校でのさまざまな取組がつながりのあるものととらえられることを念頭におきました」(進路指導研究係主事の秋山香江先生)

自分の殻を破り、「幸せ」という極めて個人的で抽象的な目標に向かって、生徒たちが何をどう目指せばよいか。悩んだ秋山先生は、慶應義塾大学の前野隆司教授の幸福に関する研究と出会う。前野教授の提唱する“幸せの4つの因子”を生徒アンケートに取り入れ、その質問の提示自体で生徒に「幸せとは」を考えさせ、かつ振り返りで自分の成長を測れるようにした。

“幸せの4つの因子”とは、つながりと感謝を示す「ありがとう!」因子、前向きと楽観を示す「なんとかなる!」因子、独立とマイペースを示す「あなたらしく!」因子、自己実現と成長を示す「やってみよう!」因子だ。

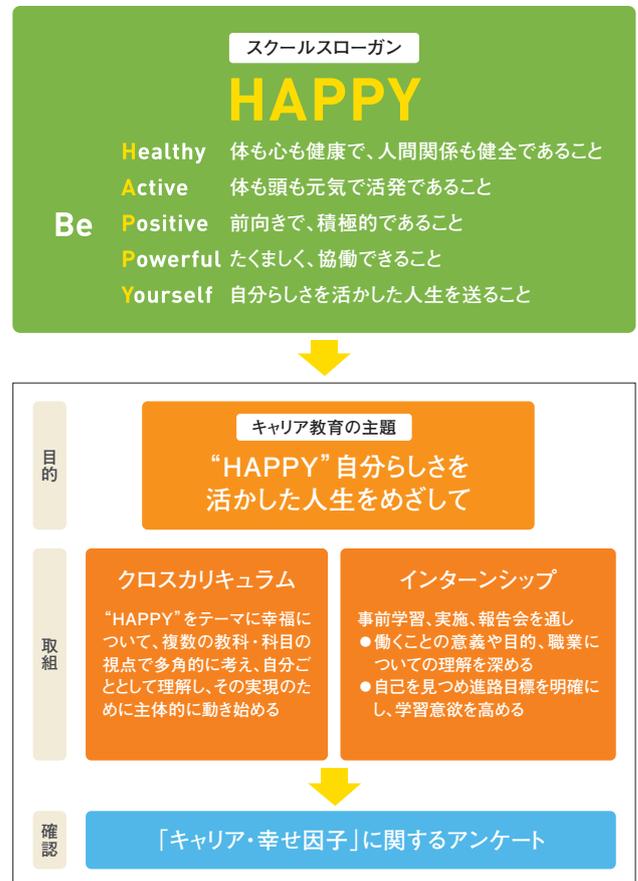
アンケートでは、キャリア教育で育成すべきとされている基礎的汎用的能力に関する項目と、

幸せの4因子に関する項目について、合計22問の設問に対して自分の状況を「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」まで5段階で回答する形式になっている(36ページの図2)。高校入学時の1年生の6月、1年生終了時の3月、2年生でインターンシップを経験した後の9月の、計3回で生徒の変化を測っている。

一つのテーマを複数教科の 視点で多角的に学んでいく

「“HAPPY”自分らしさを活かした人生をめざして」を主題に掲げたキャリア教育は、クロスカリキュラムとインターンシップの二本柱で進められている(図1)。以下、二本柱の取組の詳細に

図1 白根高校のキャリア教育の概要



ついて紹介していく。

クロスカリキュラムは、“HAPPY(幸せ)”をテーマに複数の教科・科目で授業を行う。

例えば、家庭科では、自分の幸せに必要なものを「地位財・非地位財」(経済学者のロバート・フランクが提唱。他人との比較で満足を得るものを「地位財」、他人との相対比較とは関係なく幸せが得られるものを「非地位財」と定義)に分類する授業、国語科ではスクールスローガンからキャッチコピーを考える授業、情報科では、「学校のHAPPYなところ」を見つけて話し合う授業などだ。幸せについて、複数の教科・科目の視点で多角的に考え、生徒たちが自分ごととして理解し、その実現のために主体的に動き始めることをねらいとしている。

「全教員の指導案は共有フォルダーで参照できるようにしています。家庭科の授業の内容を

国語科で活用したりと、教科を越えて参考にしながら授業を設計していただきました」(秋山先生)

事前事後の学びまで丁寧に設計されたインターンシップ

インターンシップは白根高校のキャリア教育の核と位置づけられ、2年生全員が地元の事業者で職業体験をする。2004年にスタートした歴史ある取組で、コロナ禍が始まった2020年度は中止を余儀なくされたものの、2021年度は全員の受け入れ先を確保することができた。

インターンシップに生徒が目的意識をもって取り組み、経験を自分ごと化するために、事前学習から事後の報告会まで丁寧にプログラムを設計している(下の写真)。

事前学習では、1年時に「地元の企業を知る」ワークを実施。来校した10企業から各生徒

【インターンシップの流れ】

事前学習



10企業のブースから生徒が3企業を選んで話を聞く「地元の企業を知る」(上)。「分野別職業人講話」(下)は座談会方式で進められた。

インターンシップ実施



2年生の全生徒が44企業で実施。一人で行く生徒もいたが、緊張しながらも自分に課せられたことをやり遂げ、企業から良い評価を得たことが自信につながっていた。

報告会



全員がポスターで自分の体験をまとめ、各クラスの代表が1年生に向けて「インターンシップ説明会」という形式で報告を行った。

図2 アンケートデータから見える生徒の変化

「キャリア・幸せ因子」に関するアンケート

ダウンロード可

職業観・勤労観

- 1) 働くことに対して不安や緊張感はなく、社会に出ることを楽しみにしている

人間関係形成・社会形成能力

- 2) 相手の考えや意見を聴き、理解しようとしている
- 3) 自分の考えや気持ちを整理して伝えようとしている
- 4) 周囲の人と力を合わせて行動しようとしている

自己理解・自己管理能力

- 5) 指示されたことだけでなく、自分で考えて行動できる
- 6) 自分の興味や関心、長所や短所などについて自分で分かっている
- 7) 自分の感情に流されずに、規則を守り、何事も取り組むようにしている

課題対応能力

- 8) 苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組むようにしている
- 9) 調べたいことがある時、自ら進んで資料や情報を集めるようにしている
- 10) 解決する問題や課題があった時、原因を考え、解決方法を工夫している
- 11) 計画的に物事を進めたり、改善を加えて実行したりしている

キャリアプランニング能力

- 12) 学ぶことや働くことの意味について理解するようにしている
- 13) 学校での勉強と自分の将来をつなげて考えるようにしている
- 14) 自分の将来について目標を立て、その実現のための方法を考えている

「ありがとう!」因子

- 15) 人の喜ぶ顔を見るのが好きだ
- 16) いろいろなことに感謝するほうだ

「なんとかなる!」因子

- 17) いま抱えている問題はだいたい何とかなると思う
- 18) 失敗や嫌なことに対し、あまりよくよしない

「あなたらしく!」因子

- 19) 自分と他人をあまり比べないほうだ
- 20) 他人に何と思われようとも、やるべきだと思うことはやるべきだ

「やってみよう!」因子

- 21) 得意としていることがある
- 22) 何か、目的・目標を持ってやれていることがある

が3企業を選んで話を聞き、自分がどんな企業に興味をもてるかを考える。「分野別職業人講話」では17分野から2分野の話聞く。少人数制の座談会方式で、生徒たちが知りたいことを質問しやすい形式にしている。2年生になってからは、ビジネスマナー講座を実施。昨年度は東京のビジネスマナーの講師からオンライン形式で講習を受けた。

インターンシップは7月下旬の3日間行われ、2021年度は44企業で127名の生徒を受け入れてもらった。コロナ禍により直前で受け入れ中止の申し入れがあるなど、必ずしも全生徒が希望通りの業種・職種では体験できなかったが、それでも多くの学びがあった。

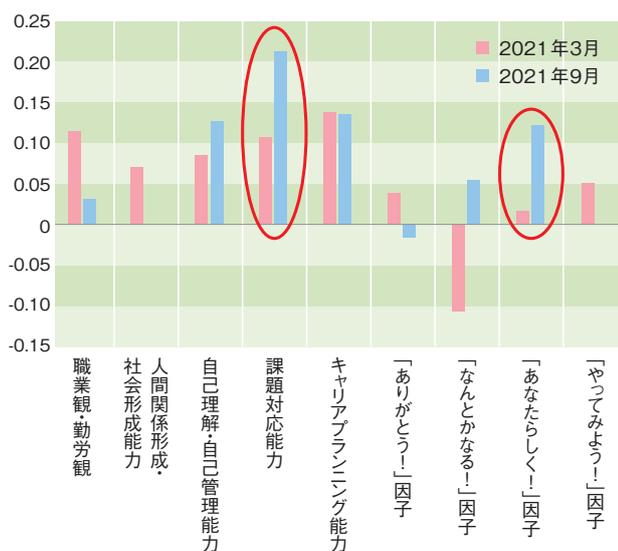
「『働く』とは具体的にどういうことなのかを自分の目で見てくるのが重要です。希望の職種とは違っていても、さまざまな職種の大人たちがそれぞれの思いをもって働いている姿を目の当たりにし、共に働いてみることで、自分が将来働くとしたらどのような感じになるかを想像するきっかけとなるからです。インターンシップは『働く』を自分ごとにするうえで非常に役立つと考えています」(秋山先生)

インターンシップ後は毎年報告会で振り返りをするが、昨年度は単なる報告ではなく、「1年生のためのインターンシップ説明会」とした。

「発表会のポスター作成段階で、自らの体験を周りに伝えようと客観視できます。また、それを他者の役に立てるという意味付けをしました」(中村校長)

自分の体験が1年生の役に立ち貢献できる

●「キャリア・幸せ因子」に関するアンケート



1年生の6月を基準(0)とし、2回目、3回目の変化を表したもの。「課題対応能力」と「あなたらしく!」因子が顕著に伸びている。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト: リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.442)

ことで、自己肯定感の醸成にもつながったという。

「あなたらしく!」因子が 飛躍的に伸びた生徒たち

一連の取組を経た生徒たちの変化は、**図2**のアンケート結果の変遷から見てとれる。また、アンケートの自由記述に表れた生徒たちの声からは、自分を客観視し、将来の進路を考える意欲が高まっている様子がうかがえる。

データでは「課題対応能力」と「あなたらしく!」因子が顕著に伸びている。「あなたらしく!」因子の設問は「自分と他人をあまり比べないほうだ」と「他人に何と思われようとも、やるべきだと思ふことはやるべきだ」の2問。「幸せ」について考える授業や職業体験、アンケートでの振り返りを通して、生徒たちが自分らしさを活かそうと一歩を踏み出し始めた証しだ。

「インターンシップ後に下降した項目もありました。それも社会の厳しさを知った気づきだと判断しています。それでも以前から本校の生徒は、インターンシップを経験して自分らしさを見出していく傾向が高いです。成績の良い生徒が大学ではなく専門学校を選択し『大学に行くことが最善策ではない』と考えるなど、自分にとって何が大事かを考えた進路選択ができています」と(秋山先生)

「県内進学者や、その先の進路も県内就職者が多いことが本校の特徴でもあります。インターンシップは地域社会で生きていく社会人としての足場となり、社会に出たときの自分の像を可視化できる体験となっているのではないでしょうか」(中村校長)

多角的な取組と社会での実体験により、同校の生徒たちは自分にとっての“幸せ”とは何かと向き合いながら進路選択に臨んでいるようだ。

＼ 生徒たちの声 /

- 1年生のときよりも進路について考えることが増えて、自分の進みたい道も少しずつ決まってきました。これからも真剣に考えてがんばっていきたいです。
- アンケートを通して今の自分を見つめなおすことができたと思う。
- 苦手なことにもチャレンジしてがんばっていきたい。
- 進路について調べるようになり、目標を立てて行動できるようになっている。
- 課題対応能力が高くて、職業観や「やってみよう!」因子が低かったので、自分からいろんなことに挑戦しようと思った。
- もっと目的をもって生活したほうが良いと感じた。
- 自分の夢や目標をもっと細かく考え、人生設計をしていきたい。
- 自分の将来に勉強がどのように役立つか見つけてみようと思った。
- 後半の設問で目標を尋ねられたことで、私は高校を卒業したら何をしようとするきっかけになった。

学校データ

1941年創立 / 普通科 / 生徒数380名(男子163名、女子217名)、全日制普通科高校。普通科高校としては山梨県内で初めて、2004年から2年生のカリキュラムにインターンシップを取り入れた。2021年度よりコミュニティスクールとして地域連携を促進している。

CASE2

働くうえで必要な力を、仲間と共に 自ら獲得し変化を起こしながら より良い未来を切り拓く人に

特別支援学校流山高等学園（千葉・県立）

高い就業実績を誇る学校に まだ足りないものは何か

特別支援学校流山高等学園は、2020年に文部科学省の研究開発校の指定を受け、目下「特別支援教育における、変化する社会で生き抜くための資質・能力とエージェンシーを育成する教育課程及び指導方法の研究開発」に取り組んでいる学校だ。

もともと同校は、以前から就業実績に定評があった。開校以来の平均就職率は9割以上。職業に関する専門学科が4つあり、専門教科の授業では、仕事を想定した実習を日々行っている。1年次から企業等の現場実習も体験。3年次には本人の希望や特性を踏まえて「就職を見据えた実習先」につなぎ、現場実習を繰り返す。そのうえで、最終的には生徒と実習先の互いの意思を確認し、就職を決める。こうした丁寧な指導で、就労へのスムーズな移行を支援してきたのだ。

ところが、2017年に卒業生の就労3年目の状況を調査すると、見過ごせない問題が浮上する。

「離職者が約2割、離職まではいかないものの、

就労に困難を抱えている人が約2割いました。キャリアアップの前向きな離職は一部。卒業生の4割近くが、就労面で課題を抱えていたのです」(研究主任・古江陽子先生)

その課題とはいったい何なのか。学校でどんな教育をすれば、生徒がその壁を乗り越えられるのか。古江先生たちは課題を分析し、これからの教育のあり方を模索したという。

離職の要因を分析するなかで より良い未来に向かう力に注目

離職や離職危機の要因を分析していくと、意外なことが見えてきた。

同校では生徒の現場実習時に、実習評価表を用いて「挨拶」「報告・連絡」「作業の正確性・スピード」「協調性」などを評価している。職場の作業で求められる力であり、就職時にも重視される力。しかし離職者の大半は、実はその作業能



左から、研究主任の古江陽子先生、生活技術科主任の豊岡優子先生、領域「私の時間」主任の磯村友希子先生

力とは違う要因でつまづいていたのだ。具体的には「親子関係」「友達・異性関係」「雇用条件」「健康面」「感情のコントロール」などで、その問題が結果的に就労意欲の低下に関係していた。

この分析を基に、同校研究部は新たな調査を行う。企業・卒業生・在校生・教員にアンケートを実施し、働くうえで大切だと思うことを、実習評価表にない項目も加えて質問した。そしてその結果も踏まえ、全職員で、学校で育成する資質・能力を5つの分野に整理した(図1参照)。

今までの方針との最大の違いは、「作業」に必要な力と、「社会生活」に必要な力をあえて別にし、その両方を育成するとしたことだ(なお、一つ目の「作業能力」は、報告・相談、反省・改善など作業上のコミュニケーションや自己実現の力も含んでおり、総合的な働く力と言える)。

「働いていくには、就労に関する力に加え、人と関わる力や、自分自身を見つめる力も必要だ、という認識になったのです」(古江先生)

まとめて表せば、「身体的・精神的・社会的にも充実したより良い未来(Well-being)に向かうための力」の育成が、同校の目標になった。

図1 より良い未来に向かうための資質・能力

作業	作業能力 はたらく	挨拶、報告・相談、反省・改善、協力・協同作業など21項目
	コミュニケーション力 かわかる	日常生活の挨拶、反省・お礼など
社会生活	生活力 くらす	読み書き、数量を扱う力など
	自己実現力 きめる	受け入れる力、将来を考える力など
	自己調整力 ととのえる	自己理解、感情のコントロールなど

計20項目

資質・能力のルーブリックを作成
生徒用にさらにカード化

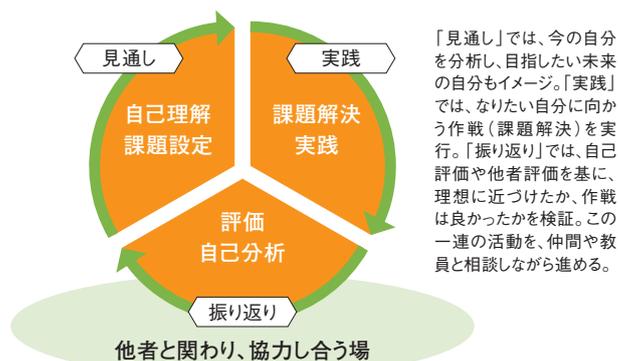
では、その資質・能力の5つの分野を、どのような指導で育むのか。

「これまでの指導は、教員のほうが『あなたにはこういう力が必要だからこうしよう』と促し、生徒がそれに従う部分があったように思います。ですが、変化が激しい社会を豊かに生きるには、生徒がより主体的に将来を見つめ、どのような力をつけるかも自分で選択・決定していくことが大切ではないか、と感じていました」(古江先生)

そこで着目したのがエージェンシーという概念だ。「変化を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」のことを言う。このエージェンシーを生徒が発揮すれば、教員主導でなく、生徒が自分でより良い未来に向かえるのではないか。古江先生たちは、授業実践と検証を重ねて、生徒が「見通し」「実践」「振り返り」の活動を回していく学習プロセスを整えた(図2参照)。

並行して、ツールの開発にも注力する。何のためのツールか。資質・能力のことを生徒が理

図2 より良い未来に向かって働きかけるための活動サイクル



解し、「私はこの力をこのレベルまで高めたい」と自分で方向づけできるようにするためのものだ。2018年から2年間かけて、次の3つのツールを順次完成させた。

①自立へのステージアップ表

資質・能力の5分野について、41の小項目を設定。各項目の目指す到達点を4段階で示した表を作成した(いわゆるルーブリック、欄外参照)。

②ステカ(ステージアップカード)

ルーブリックの内容を、平易な言葉とイラストで表し、トレーディングカードふうの教材にした。ハガキ大のサイズで、合計164枚。生徒はこのカードを並べながら、「挨拶」「継続力」「健康管理」などの資質・能力の小項目について、今の

自分はどの段階で、いつまでにどの段階まで高めたいかを考えられるようになった。

③ステカ・パソコン版

パソコンの画面上でも、カードを選んで自己評価できるようにした。また、その自己評価と、教員による他者評価を比べながら、全体を俯瞰できるようにもした(図3参照)。

「私の時間」を創設、仲間と一緒に今の自分、なりたい自分を考える

2021年からは、すべての教育活動を関連づけて、カリキュラム全体で資質・能力を伸ばすことにも取り組んでいる。領域「私の時間」という年間35時間程度の枠を創設。この時間を軸に、生徒がステカを使い、今の自分、なりたい自分、その未来に向かうための作戦を考案し、思い描いたことを学校生活全般で実践するようにしたのだ(41ページの図4参照)。

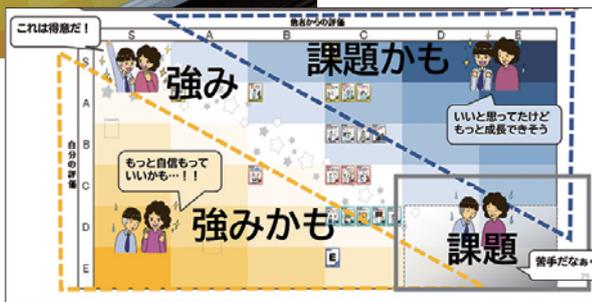
領域「私の時間」主任の磯村友希子先生は、この一連の活動で、「仲間と相談し、一緒に考える」ことを重視してきたという。自己評価のときも、未来に向かう作戦を立てるときも、一人で考える時間とは別に、生徒同士の対話の時間を必ず入れた。

「一緒に考えると、自分とは違う意見があることに生徒が気づきます。他人の意見を取り入れるとできることが広がることや、相手に意見して力になれると嬉しいことも味わいます。いろいろな意見から『最終的には自分で選ぶ』という自己決定も行います。自分だけで考えず、人との関わりのなかで課題を解決できるようになって

図3 ステカ(ステージアップカード)の活用



ステカ・パソコン版。画面上で「報告・相談」など各項目について今ほどの段階か4枚のカードから選択。全項目を選べると、自己評価・他者評価をマトリクス表で俯瞰できる。表の見方がわからなくても、下の画像の提示で、生徒が「強み」「課題」「強みかも」「課題かも」をつかめるようにしている。



ダウンロード可

※流山高等学園のルーブリックやステカ(ステージアップカード)一覧は、以下よりダウンロードできます。
ダウンロードサイト:リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス(Vol.442)

ほしいのです」(磯村先生)

ある話し好きの生徒は、人に話を聞いてもらえないとイラッとする自分に課題を感じていた。だからステカにあった「ストレスマネジメント」を高めようと、苛立ったら一人になって気持ちを静める作戦を実行した。でも仲間と考えるうちに、別の作戦も見つかったという。話を聞いてもらえないのは自分の接し方にも問題があったと気づき、ステカにあった「返事」の力に着目、人に注意されたときに返事をする作戦も加えた。働くことや生活することへの向き合い方が、一人でがんばるものから、みんなで課題を乗り越えるものに変化したのを感じさせる出来事だった。

自分の弱みの克服を楽しんだり その弱みを受け入れたりする

生徒たちは専門教科の授業でもステカを活用している。例えば生活技術科の生徒は、糸を織り、できた布地を裁断・縫製して布製品を作り、文化祭で販売することに取り組むのだが、その際に自分が高めたい力を、単元ごとにステカを使って選ぶのだ。「作業の正確性」「継続力」などがあり、なりたい自分のレベルも設定したう

えて、そこに向かうための作戦も考え、日々の授業で実践。授業の終わりに○か△かで自己評価し、週ごとや単元ごとの振り返りも行う。

同授業を受けもつ豊岡優子先生は、「対話すること」と「やってみること」を大切にしてきたという。

「生徒が目標や作戦を立てるとき、最初は介入しませんが、悩んでいたら話しかけます。話を聴くと生徒の思いが出てくるので『いいね、それを書こうよ』と促すのです。何もしないうちから『できない』と思いつくこともあるので、『まずはやってみよう』とも促します。やってみてどうなるか感じて、難しいことがあれば、そこをまた一緒に考えよう、と」

生徒の成長も感じている。気づけば、まだ評価が低いステカの項目を、生徒が自分で探すようになった。そこで目標を設定し、作戦を立て、改善すれば、未来は変えることができ、達成感も味わえることを知ったからだ。

もちろん人にはそれぞれの特性があり、克服しづらい弱みもある。だから3年生の終盤では、領域「私の時間」で、社会に出たら自分の弱みにどう対応するかを、強みの生かし方と合わせて考える。弱みの克服を目指してもいいし、その弱みを受け入れ、「あらかじめ周囲に説明する」「周囲

図4 流山高等学園のカリキュラム・マネジメント



左側の「私の時間」では、ステカを活用したり卒業生の講話を聴いたりして、作業面から生活面まで幅広い今と未来を想定。理想の未来に向かう作戦も考える。そのうえで、右側の学校生活全般で作戦を実行し、SHRなどで振り返る。さらに左側の「私の時間」で要所の振り返りも実施。このほか、園芸や福祉などの専門教科の授業でも、ステカを活用し、主に作業面について、見直しを立て、実践し、振り返ることをしている。

に助けを求める」といった代替策を考えてもいい。何を選択するかは本人次第。でもこの作戦も仲間と一緒に考える。弱みもある自分のことを「友達が受け入れてくれた」「相談にも乗ってくれた」ことで、気持ちが楽になる生徒も多いという。

生徒が自分で見つけた 「働く」や「未来」を目指していく

活動を通して先生たちが実感したこともある。未来に向かって「生徒が考える」ことと、その構想をもって「人と関わる・実践する」ことの掛け合わせが大事である、ということだ。

「ステカを使えば、今の自分や、なりたい自分を一応は考えられます。でもそれはまだふわっとしたもの。そこから仲間や教員との対話で気づきを得たり、実習で自分の強みや弱みについて納得したり、卒業生や先輩と話すなかで憧れを抱いたり、実体験の蓄積があって初めて、ストンと腑に落ちる今の自分、なりたい自分ができてるんです」(古江先生)

すると、なりたい自分の描き方も変わるという。最初はステカや資料を参考に「何々したい」「何々したい」とブツ切れの言葉を並べていたのに、次第に「何々をしたいから、こんなことをやって、こうしたい」と、言葉が有機的に結びついていくのだ。

あなたは何のために働き、どんな未来に向かいたいのか。そのことを、借り物の言葉ではなく「自分の言葉で書けるようになった」ところに、磯村先生は生徒の成長を感じている。

生徒INTERVIEW /

友達がいっぱいできるこの学校で まだ改善できる部分を伸ばしたい

専門実習では、織り機で糸を紡ぎ、布を織ることをしています。最初は難しかったですが、ステカにある「作業のスピード」も今は上がり、「継続力」もつきました。今ががんばっているのは「報告と相談」。私は記憶するのが苦手なので、報告のためにメモを取っています。メモの取り方は、相談会で先輩に教わりました。

この学校の好きなのは、友達がいっぱいできて、先生方や先輩方も優しいところ。みんなからの他者評価では、私には作業面でまだ足りないところがあるので、これからも改善していきたいと思っています。力をつけて、親にも感謝の気持ちを込めて何か贈ったり、親孝行もできるようになりたいです(原田さん)。

目標を立てて達成することや みんなで考えることを楽しみたい

製品作りのなかで、生地を一つひとつ組み合わせ、ミシンで縫うことをしています。ステカにある「安全管理」を大事にすることで、針を折ることや、指を怪我することはなくなったので、今は「反省と改善」に取り組んでいます。ミスがあったら行動を振り返り、改善点を見つけ、次に生かすんです。初めてミスなく製品を作れたときは「やればできる!」と嬉しくなりました。

将来もミシンの仕事がしたいです。あと、一人暮らしもしたい(笑)。社会に出て一人でやっていけるかは、まだ不安です。でも、生産量のことをみんなで協力して考えたり、声をかけ合って作業するのは好きなので、そんなふうにながらばれたらいいと思います(村井さん)。



左から、生活技術科2年生の村井 光さん、1年生の原田知佳さん

学校データ

1997年創立 / 園芸技術科・工業技術科・生活技術科・福祉・流通サービス科 / 生徒数280人(男子208人・女子72人) / 知的障害のある生徒を対象とした高等部単独の特別支援学校。2020年より文部科学省指定「研究開発学校」。

CASE3

自分とは異質な他者の考えに触れる 家庭科の授業が、 多様な“生き方・働き方”への扉を開く

桐朋高校（東京・私立）

男子校の家庭科の授業で 女子校とのディスカッション

家庭科は従前から、保育や福祉、生活設計などキャリアプランに関わる単元が含まれる教科だ。男子校である桐朋高校では2年生が履修し、生徒たちの視野を広げ、将来の自分の家族、暮らし、仕事、生活と社会のあり方などをつなげ、生活のリアリティを感じ取りながら「生きる」ことを考えるカリキュラムを組んでいる。その一つが、系列校の桐朋女子高校との意見交流会だ。

この取組が始まったのは20年前の2001年度。桐朋高校と桐朋女子高校の当時の家庭科教員同士の交流の中から、両校の生徒に人生観についてのアンケート調査を行うことになった。例えば、「仕事を選ぼうとするときに重視する

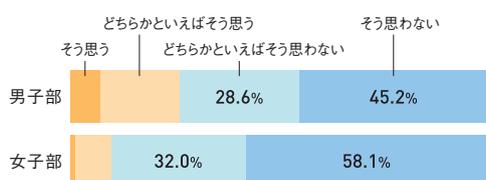
こと」「結婚相手を決めるときに自分にとって大切な条件」「日常生活のなかで性別の違いにかかわることで不公平と感ずること」「結婚後の夫婦の働き方」「共働きでの家事分担」など、職業観、結婚観、男女の性差についてのジェンダー観、結婚後のライフスタイルについての展望などを尋ねるものだ。

開始当初は女性の社会進出が進み、女子生徒たちが社会人としてのキャリアを積みながら家庭ももつ人生を構築したいと考えている一方で、男子校の生徒にはその考えに対する理解がまだ得られにくい時代だった。男女で意見の違いがあるなら、実際に面と向かってお互いの疑問を意見交換してはどうかと始まったのが、両校での交流会だ。

男女の違いだけでなく、社会に出れば自分と

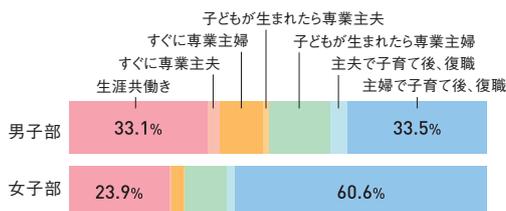
図1 桐朋高校と桐朋女子高校のアンケート比較（昨年度・一部抜粋）

● 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである

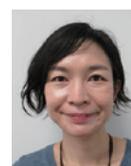


夫は仕事、妻は家庭という考えは男女とも大半が「そう思わない」と回答しているが、女子の方が否定がより多い。

● 結婚後のライフスタイル



結婚後のライフスタイルは、男女とも「(妻が)主婦で子育て後に復職」が最多で女子の方がその傾向が高かった。



家庭科
中山めぐみ先生



は異なる多様な意見や見方に遭遇することになる。そのときに、例えばパートナーと意見が合わないと思ひ悩むこともあるだろう。女子生徒たちは、同校の生徒たちが将来共に働いたり、パートナーとして生きていく可能性がある同世代人だ。彼女たちの社会参画や家庭に対する意識や本音を高校生のうち知り意見交換することが、将来に想像される困難へのシミュレーションになると考えているのだ。

議論が白熱したときに データが自分のものになっていく

カリキュラムの流れは、2年生の1学期にライフイベントを体系的に学び、生活設計、いわば「未来の年表」を作成する授業を受けた後、両校でそれぞれアンケートを実施。集計したアンケートデータに基づき、相手校に質問してみたいことについてクラスごとに議論し、3テーマほどに絞りこむ。そのうえで、11月の初旬に各校から20名ずつ、計40名の生徒が集まって交流会を実施。各校から4名ずつの8名1グループでディスカッションを行う。

「校内での議論でも交流会でも、結婚観の集計結果について生徒たちは大いに盛り上がりま

す」(中山めぐみ先生)

例えば、結婚後のライフスタイルについて同校の生徒の回答は、「生涯共働き」が昔より増えているものの、男女ともに「(妻が)子どもが生まれたら専業主婦となるが、子育てが一段落したら復職する」が現在でも最多回答だ(43ページの図1)。

「事前授業で女性の就業率がM字カーブする日本の特徴や、一度退職すると復職が大変な話はしていますが、生徒たちには就職や結婚後のイメージや、どうキャリアアップしていくかという視点をもつことはまだ難しいようです」(中山先生)

また交流会では、実際に対面し、ディスカッションを通してわかること、気づくことがあると学んでいく。例えば過去には、女子が結婚相手に求める条件の上位である「収入のよさ」について、男子生徒は「女子は収入が高い相手に養われたい」と理解していた。しかし、女子生徒たちから、自分に収入がある前提で「お互いが近い収入＝収入がよい」で、収入が近ければ価値観も近くなるという思いを説明され、男子生徒たちは驚いていた。

教員自身の人生観が影響しかねないテーマのため、アンケート実施時も、校内および交流会での議論時も、なるべく介入を少なくしているという。特に生徒たちの議論が活発になるアンケート集計のデータを見せたときは、自分の視点でデータを読み取ろうとしている大事な瞬間だ。会話が盛り上がるのはデータが示す数字を自分ごととして捉えている表れでもあるため、生徒たちに議論を任せるようにしている。

「取組後の日常の会話に、その後のライフイベントの話が出てきたときの方が本音が出ますし、それを友達同士で共有できることの方が大事だ

昨年度の交流会。「初対面での意見交換でも、お互いの意見を受け入れる柔軟さは大人以上にあり、感心します」(中山先生)



昨年度から始まった、交流会後の報告会。なかにはアンケート項目以外の話題で議論されたことを報告する生徒も。



と思っています。そのときが一番自分のものになっているからです」(中山先生)

未知の人生観、家族観に触れ 多様な生き方を発見する

交流会後の振り返りとして、昨年度は代表者による学年全体への報告会を開催した。自分たちでディスカッションの議題や内容を発表し、意見交換からの気づきを仲間に伝えている様子から、交流会に参加したことへの意義を見出していることが見てとれた。

報告会后に生徒全員が書いた感想の一部が左の「生徒たちの声」だ。交流会によって生徒たち自身の意見に必ずしも変化が起きているわけではない。

「女子生徒の意見に驚いたり、新たな発見があることに意味があると思っています。近年は、ニュートラルな意見をもつ生徒が多く、性差よりも個人によって意見が多様化しているように感じます。ただそれが本音なのか、時代の流れに忖度した考えなのかはわかりません」(中山先生)

人生観というセンシティブなテーマでの議論自体も、自分とは異なる生育家族の姿があることに気づき、「そういう考え方で生きてもいいんだ」と生徒たちの世界が広がる一端になっている。

家庭科での体験が、人生の 岐路で勇気を出せる一助に

今後は過去のアンケート回答の分析をしてみたいと考えている。その変遷を生徒と共に俯瞰

してみることで、現在を生きる生徒たちが、自分を取り巻く環境に対して気づきを得るのではないかと期待しているからだ。

「家庭科における学びはすぐに、またダイレクトに生徒の力になることばかりではありません。しかし、生徒たちは高校を卒業した後に、さまざまな岐路に立ち困難に向き合っていかなければなりません。他者と向き合い、意見を交わし、生き方について考えた体験が、人生のがんばりどころで勇気を出せる一助になることを願っています」(中山先生)

＼ 生徒たちの声 /

- バリバリ仕事をしてキャリアを築きたい人もいれば、家庭を大切にしたい人もいて、考え方は人それぞれなので、お互い話し合っって向き合うことが大切ではないかと思いました。
- 「女性は男性におごってほしいとは思っていない」と聞いて、本当にそう思っているのかと疑問に思い、実際に会って話してみないとわからないこともあると感じた。今後生きていくうえで、相手の考えをしっかりと聞くべきだと思った。数年後には社会人になり、社会を支えていくうえで、夫婦別姓問題など、すべての人がより良く生活できるように取り組んでいきたい。
- 女性が男性に求める条件はさまざまであることがわかった。今後はさまざまな場面で女性と協力しなければならぬことが増えるので、お互いに尊重し合える関係がつかれるようにしたい。また、結婚できたらパートナーとの協力はより大事になると思うので、協力して楽しい家庭を築きたい。

< 桐朋女子高校の交流会参加者感想 >

- 私は参加者を無意識に男女で区別して認識していたことに気づくことができました。自分の先入観に気づくことができたのは大きな利益になりました。
- お互いが思うことについて、なぜそう思うのかの経緯を探っていくことで誤解が解け、新しい発見がありました。

学校データ

1941年創立／普通科／生徒数955名(男子校)、「自主」「敬愛」「勤労」を教育目標とし、国公立大学・最難関大学・医学部進学者も毎年多数輩出。進路指導では「自分は何をしたいのか」を考え、自分を活かす場としての進学先を選択するよう導いている。